
姉が俺のこと好きだってさ.....えっ!?

竹野けた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉が俺のこと好きだったさ……えっ!?

【Nコード】

N3197Z

【作者名】

竹野けた

【あらすじ】

「私の初恋の相手は実の弟よ」
主人公”相崎優太”は、ある日突然キスをした。しかしその相手は主人公の実の姉だった!?
弟を振り向かせるため奮闘する姉、姉の誘惑に抵抗する弟のブラコンラブコメディー!

この作品には作者の強い願望が一部含まれております。その為、過激な性的描写がある恐れがございます。警告タグをご確認し、苦手な方は無理にお読みにならないことをお勧め致します。

第1話 私は……本気よ

「ねえ優太^{ゆうた}。私、優太のことが好きなのよ？」

夢だ。

「ねえ優太。私と付き合いましょ」

これは夢だ。

「ねえ優太。私とデートしよっ？」

夢じゃないきゃダメなんだ。

「ねえ……優太。……き、キスしよ……」

夢じゃないと

「ゆう……た……。私と……今晚一緒に……」

夢じゃないとダメなんだ。

「優太……。私たち　　だけど、関係……無いよね？」

頭痛がする。別に風邪を引いたわけじゃない。
じゃあなぜ。

なあに、理由は簡単。夢だ。

どういっわけか最近、変な夢をほぼ毎日見る。

夢の中の俺がなぜか謎の少女に告白されたり、キスを求められたり、さらに言々と男女の……アレまでも求めてくるのだ。

これって良い夢として捉えていいのだろうか。

夢の内容を考えた感じでは、俺はほぼ毎日素敵な夢を見ている幸せ者かもしれない。

でも、少し気にかかる点もいくつかある。

一つ目はその謎の少女の顔がわからないこと。あと一步で顔が見える！ というところでもいつも目が覚めてしまう。

そして二つ目、それは謎の少女の声が目や口を重なることに声が歪んで聞こえるのだ。初めてこの夢を見た時ははつきりと透き通るように、夢の中の俺へと届いていた。

しかし、その夢を見始めて約一週間。なぜかその謎の少女の声は、まるでトンネルの中で叫んだかのように歪んで聞こえるのだ。

……これは一体何を意味しているのだろうか。

軽い頭痛を頭に抱えながら、俺
相崎 優太は布団から

体を起こした。

季節は春、でも夏になりそうといった何とも言えない微妙な時期。それでも俺は冬の寒さ、夏の蒸し暑さを感じることなく、清々（すがすが）しい朝を迎えた。

「あつ、優太。おはよ」

「……おはよー姉さん」

寝かしていた体を起こし、まだ微かにぼやける視界を目で擦っていると、台所の方から聞きなれた声が聞こえてきた。

俺のひとつ上の姉、相崎 亜衣だ。

今俺は高校二年生だから、つまり姉の亜衣あゐは高校三年生ということになる。おまけに学校は同じ学校に通っている。

「ほら、朝ご飯できてるから、さっさと食べて」

「……はいはい」

俺は机の上に置かれた食パンにバター塗り、そのままかぶりつく。自慢して言えるものではないが、我が家は俺と姉の二人暮らしをしている。

理由は父親の海外への単身赴任だ。

父親の単身赴任が決まった時、父親は「大丈夫、安心して待っていてくれ!」と、自信満々に言っていたが、それを聞いた母親は「キャベツとレタスの見分けすらつかない人を一人にできないわよ」とそのまま父親について行ってしまったのだ。

息子達おれたちを残して。

ちなみに我が相崎家は五人家族だ。父親に母親、俺に姉さん、そして妹もいる少し騒がしい家族なのだが、父親と母親が海外へ行くと決まった時、「あたしも行く!」とそのまま妹も海外へ旅立ってしまった。

両親は息子達を残して海外へ行こうとするわ、妹は海外へ行きたいという理由だけで海外へ留学? するわでもう、我が家はある意味崩壊してるのである。

それでも一応、月に一回両親から生活費は貰っているのだけど。

そして今現在、俺と姉さんは面倒な役目を負わされている。

思い出すだけのために息が出るから、機会があるまで忘れていよう……。

「優太ー、そろそろ学校行くわよ」

「あー先行って。ちよつと便所」

「はあ……。待ってあげるから早くしなさい」

「いや、待たなくてもいいのに」

朝食をとり終わった俺は、トイレで用を足し、玄関で待っていた姉さんと渋々一緒に登校した。

学校が終わり放課後、俺は夕食の準備も兼ねてスーパーに来ていた。

俺と姉さんは家事をそれぞれ役割を決めて生活している。

例えば朝食、朝食は先に起きた人が準備するという決まりになっている。

他にも洗濯、アイロンがけは常に姉さん、学校の昼食の弁当、夕食、食器洗いは常に俺と役割を決めているのだ。

ちなみに役割の決め方はじゃんけんで、俺は見事に全敗し、飯を作るという面倒な役割になったというわけだ。

「今日は野菜炒めでいいか」

スーパーで買い物を終え、俺は買い物袋を片手に自分の家へと向かう。

しばらく歩くと、いつもの見覚えのある赤い屋根のアパートが目に入ってきた。

これが俺と姉さんが生活している場所だ。

台所に押入れ、お風呂もあり、小さなベランダもある。二人暮らしには何一つ不自由の無い環境だ。

カツカツと二階建てのアパートの階段を上がっていく。

「ただいまー」

「おかえり優太、さっさとご飯作りなさい」

「帰ってきたばっかの奴にそんなこと言うなよ」

「いいじゃない。ご飯担当は優太なんだから」

「……はあ」

俺はため息をつきながらもスーパーで買った食材やらを冷蔵庫へと入れていく。

あつ、牛乳買っの忘れた。

「ねえ優太。今日の夕食は何？ 私うどんが食べたいわ」

「野菜炒め」

「チツ」

「舌打ちすんな！」

なんでこの姉はこうも上から目線なんだ。まあいつものことだけど。

「ホントに野菜炒めなの？ 一昨日食べたわよ」

「毎日毎日メニュー変えられるほどの調理技術があると思うな」

「……使えないわねえ」

「あああああああもう！ わかったよ、うどん作ればいいんだろ、うどん作れば！」

俺は半ば^{なか}イライラしつつも、夕食のメニューを「野菜炒め」から

「うどん」へと変更した。

姉さんに刃向うとロクなことが起きない。

前に姉がリクエストしてきた弁当のメニューを、俺はすっかり忘れており、唐揚げを入れると言われていたにも関わらず、間違えてもやし炒めを入れてしまった時はヤバかった。

俺の上に馬乗りされて百回謝るまで許してくれなかった。……今でも忘れられない。

「ふふっ、やっぱり優太は優しいわねー」

……反抗したら何されるかわかったもんじゃないからなあ。

「ねえ優太。私」

「何？」

俺がそう聞き返したとき、姉は俺の後ろに立ち、後ろから抱きついてきた。

「ちよっ、くつつくなよ」

「私、優太のことが好きなのよ？」

「はっ！？ 何をバカなことを言っ

」

俺が言おうと思ったことを口に出し切る前に、俺の唇は姉さんの唇と重なり、ふさがれた。

「私は……本気よ。だって、初恋の相手は優太だもん」

姉さんはそう言って再び俺にキスをした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3197z/>

姉が俺のこと好きだってさ.....えっ!?

2011年12月11日02時57分発行